

諸磯 c 式土器以前

関根慎二

1 はじめに

厚手式、薄手式とは異なる型式の土器として注意されてきた諸磯式土器は、昭和の始めに編年的な位置づけが確定した。編年的位置づけがなされるまでの過程で、種々の論争がなされたのは、学史の示すとおりである。編年的位置づけがなされて後、山内清男氏により三細分されたのは、縄文土器編年研究の大きな成果であった。

諸磯式土器が細分され、諸磯 a 式、諸磯 b 式、諸磯 c 式の型式概念が多くの研究者に植え付けられて以来、諸磯式土器を語る時に諸磯 b 式土器から諸磯 c 式土器へと移行する際のヒアタスの大きさを指摘されてきた。それは、土器型式の大きなモデルチェンジであると表現されたりもした(註1)。しかし、近年の発掘調査による膨大な資料の増加により、1970年代後半から1980年代前半にかけて諸磯 b 式土器細分の報告が相次いでなされた(註2)。次いで1980年代後半になると、諸磯 b 式新段階と諸磯 c 式の間隙を埋める土器資料が発見されるとともに、諸磯 b 式土器から諸磯 c 式土器への土器変遷についての編年が試みられた(註3)のである。

本項では、始めに山内清男氏の先土器図譜に提示された諸磯式土器型式の細分以後、型式として認識されてきた諸磯 c 式土器がどのように各研究者に理解され、型式概念が作られたのか研究史を通して再度確認する。さらに、諸磯 b 式土器、諸磯 c 式の土器の文様変遷を取り上げ、現在認識されている諸磯 b 式土器と諸磯 c 式土器の間隙を埋める土器群を地域を限定して捉え、限定された地域における土器変遷の過程を検討することで地域の特性を捉えてみたい。

2 諸磯式土器細分の過程

① 諸磯式土器の細分と諸磯 c 式土器の認識

諸磯式土器が学史上みられたのは、明治の始めであるが土器の編年的研究により縄文土器編年上の位置づけがなされたのは、大正の終わりから昭和の始めである。山内清男氏の報告による「下総上本郷貝塚」によって前期の終わりに位置づけられた。

さらに諸磯 a 式、諸磯 b 式土器、諸磯 c 式土器が現在のように細分認識される端緒となったのは、同氏の先土器図譜である。本項では、これ以後の各研究者の論考を通して諸磯 b 式、諸磯 c 式の認識の過程を追っていくことにする。諸磯 b 式終末、諸磯 c 式土器の認識の過程から編年細分の基準になった事柄を検討してみたい。

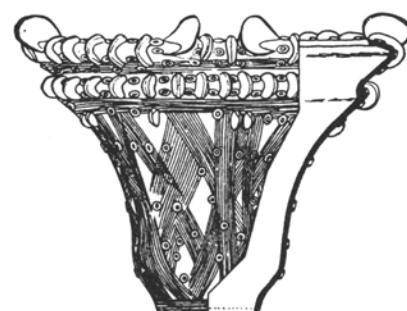
始めに、諸磯式土器を a、b、c と細分記述の見られるものは、山内清男氏(1939年)の先土器図譜(註4)であり、この時の諸磯式土器の認識は、次の通りである。

「この式には二三の細別型式があるが、大体に於いて前期の前半と異なって繊維の混入無く、中期厚手式より器壁薄手であり、器形は深いものが多いが、浅いもの、或いは壺形に近いもの等を生じて居る。縄紋は羽状縄紋全く無い又は稀であって、種類の変化に乏しい。文様は、半截した竹管を引いて作ったもの、その先端を圧して作った弧形の圧痕（所謂爪形文）等が通有である。諸磯式の細別に就いては編者は二つの区分を暗示した。即ち諸磯a式は横浜市子安貝塚（パンシン台貝塚—甲野勇氏発掘報告）のを例に引いたが比較的薄手で、縄紋が多く、文様少なく、竹管条痕繊細であり、隆線を伴うことが少ない。諸磯b式は本元の諸磯貝塚の土器を例にとり、比較的厚手で、縄紋比較的少なく、文様多く特に隆線紋を伴うことがある。器形は口頸部の内湾した、中期土器に近似した例が少ない。この二型式の存在はその後多くの資料について当てはまり確定的である。この他諸磯式の第三型式諸磯c式と云うべきものの存在も明らかになって居る。これは半截竹管による集合条線、瘤状突起、半截竹管先端の圧痕のある隆線等々を特徴とする一群の土器であって十三菩提式又は五領台式へ相当近似した部分を持って居る。分布は武藏・相模・伊豆・信濃に及んで居る。これらの三つの細別については詳細な報告はして居ないが、近頃の二三の人物に実物に就いて教示したり、研究指導をしたことがあるので、それらの人の著作物中に編者の意見（註5）がしばしば現れているようである。ここで注意すべきことは以上の細別は武藏相模を中心として居ることであって、北関東に於いては多少の地方差を持って居り、新型式の設定を要する如くに見えるのである。」

ここで山内清男氏は、諸磯a式、諸磯b式、諸磯c式と三細分を示唆したのである。また、諸磯c式土器については図示されていないが分布範囲、特徴などが示された。また、他の研究者に教示する事によって、諸磯式土器細分の基本的な概念基準が認識され広まったのであるが、詳しい内容が公にされず、後の型式の混乱を生じる原因ともなった。

諸磯c式土器について現在みることのできる記述としては、1956年河出書房から出版された日本考古学講座3「縄文文化」ではないだろうか。吉田格氏が各地域の縄文式土器関東において栃木県（註6）東光台遺跡の資料を図示して諸磯c式土器としている。同氏は諸磯c式土器を「諸磯c式土器は少し薄手となり色は赤褐色・黄褐色で形は口辺が外反する甕形土器である。

縄文は少なくなり文様は半截竹管による平行沈



1図 諸磯c式土器

線を地文として細かく施文される土器や、細隆起線には半截竹管による刻み目が細かく口縁より胴部にかけてつけられて、平行線・渦巻となる土器があるが、とくに口辺部には縦長の瘤やボタン状の小さい瘤が全面に装飾される。」と解説している。また、同書の中部地方は、藤森栄一氏が諸磯 c 式土器の時期について書いている。「諸磯 C 式の時期になると、伊豆地方や山梨県、長野県などが明らかに分布圏の核と認められるほどになる。すなわち山梨県で花鳥山 C 式と分類されたものは、同県下の諸磯式土器系遺跡の大半を占め、長野県八ヶ岳山麓では前期後半の遺跡の少なくとも八十%以上は下島式土器のみを出すのである。一中略一下島式土器では縄文の使用はほとんどなくなり、幅の狭い半截竹管の平行線を縦や斜めの方向にぎっしりと条痕文のようにひいたり、その上に竹管で細かく刻み目をつけた浮線で飾ったものが大部分である。」としている。藤森氏は、下島式という名称を結節浮線文土器に与えながら下島出土の耳朶状の貼付文のある土器を図示しているところに、下島式と諸磯 c 式土器の混乱がみられる。この両者の諸磯（下島）式土器に対する説明文に共通するのは、「細隆起線には半截竹管による刻み目（吉田氏）、竹管で細かく刻み目をつけた浮線で飾った（藤森氏）」と記述されている。これは、山内清男氏の先土器図譜にある「c 式と云うべきものの存在も明らかになって居る。これは半截竹管による集合条線、瘤状突起、半截竹管先端の圧痕のある隆線等々を特徴とする一群の土器」という記述にも当てはまるものがある。しかし、吉田氏、藤森氏の文中に図示されている土器は、浮線に竹管で細かく刻み目をつけた土器（結節浮線文）とは異なる土器で貼付文の土器であった。（註 7）（1 図）

次いで、1964年に刊行された「日本原始美術 I」において、再び、日本考古学講座 3 に使用された長野県下島遺跡、栃木県菱村東光台遺跡出土資料と山梨県花鳥山遺跡出土の資料が諸磯 c 式土器として解説・写真図版により公になった。これにより日本考古学講座掲載の資料と共に諸磯 c 式土器のイメージは、下島遺跡出土の土器に代表されるような貼付文の土器となったのである。一方、山梨、長野地域に多く見られる結節浮線施文の土器というのも先土器図譜や日本考古学講座では諸磯 c 式土器として捉えられていたのであるが、「日本原始美術 I」では詳しくは触れられていない。十三菩提式、鍋屋町式土器として結節浮線文の土器は、掲載されている。結節浮線文の土器が甲信地方に分布しているとしながら貼付文系土器を下島式としているなど浮線文系土器との地域的な分布も考慮されずに混同されている。ともあれ、諸磯式土器は三区分された型式としての認識が整ったのである。

② 諸磯 b 式終末の土器

1970年代以降増大した発掘調査により諸磯式土器の細分の細分が行われるようになった。鈴木徳雄氏、中島宏氏、今村啓爾氏、鈴木敏昭氏等の研究により諸磯 b 式土器の細分が試みられるようになったのである。

鈴木徳雄氏の諸磯 b 式終末の土器（鈴木徳雄1979）

白石城の報告書で氏は、諸磯 b 式土器の最も新しい段階を紹介している。

集合沈線に近い比較的密な平行線文が主体となり、“いわゆる「風車」状渦巻文、が崩れた状態

を示す。器形は、著しく外反し、口縁部は強く内屈する。土器を諸磯 b 式終末の土器とした。

中島宏氏の諸磯 b 式終末の土器（中島宏1980）

東光寺裏遺跡出土の土器を諸磯 b 式古段階、新段階と分けている。5号住居址出土の土器を、口縁部の矢羽根状集合条線、円形、耳朶状の貼付文を欠く点でまだギャップがあるとしながらも諸磯 c 式土器に近い土器であるとしている。

今村啓爾氏の諸磯 b 式土器から諸磯 c 式土器への変遷感（今村啓爾1980）

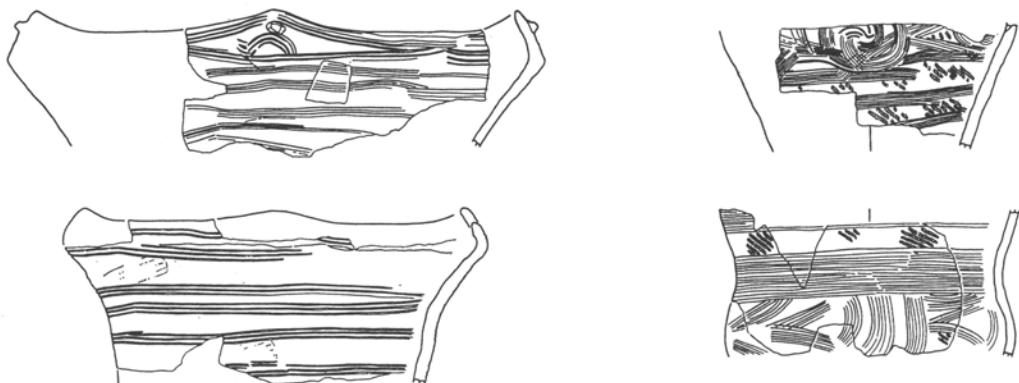
氏は、伊豆七島の縄文文化1980「付論 諸磯 b 式 c 式土器の変遷と細分」において諸磯 b 式新段階の土器を紹介している。

「口縁は緩やかに外反するものと「く」の字形に内折する。後者は b 式中段階のキャリバー形の内湾する口縁からの変化である。文様帶の設定も b 式中段階に近いが、文様帶の境界線はますますはつきりしなくなり、消滅したといつてもよい。口縁部の文様帶は収縮し、渦巻文は退化するが、胴部の平行沈線間にも渦巻文などのモチーフが加えられるものも多い。口縁部の棒状、ボタン状の貼付文は b 式中段階の貼付文（獣面の形をとることが多い）からの続きであるが、口縁が緩やかに外反する平縁の土器では、貼付文が発達しあはじめる。胴部の水平方向の数本一組の沈線文が中段より発達し、縄文部と集合平行線が交互に帯状をなす特徴が著しい。浮線文を有する土器でも浮線文が細く纖細になり、数本一組になって水平に加えられる傾向の著しいものは、b 式新段階に特徴的な口縁部が「く」の字に内折するものが多いので、大体この時期に属するものであろう。一般的にいって、口縁が「く」の字形に内接する器形の土器は b 式的要素が強いが、西原遺跡に多いゆるやかに外反する口縁の土器は c 式的傾向が強い。b 式新段階の時間的幅の中で浮線文の比率が急激に減少して行くようである。」

鈴木敏昭氏の諸磯 b 式土器終末の土器（鈴木敏昭1980）（3図）

氏の論考では、諸磯 b 式土器を、b 1 → b 2 （古）→ b 2 （新）→ b 3 の4段階に分けている。

鈴木敏昭氏は諸磯 b 3 式土器を次のように説明している。「器形は四単位の波状口縁。口縁部は、



2図 諸磯 b 式終末の土器

靴先状に屈曲。底部は、平底だが、算盤玉状の物もある。II文様帶は、数本から、十数本の集合条線による平行沈線文が数段にわたってめぐらされるのみで、簡素である。入り組み状の渦巻とそれをはさんで菱形状に構成された文様、及びそれに準じたモチーフが、波状部と同単位で帶状にめぐらされた物もある。地文には、RLの斜縄文が施されることが多い。I文様帶は、内屈する部分を境に、文様帶が上下に分離される点が挙げられる。上部をIa文様帶、下部をIb文様帶として自立化されたのである。Ia文様帶には、II文様帶に施される入り組み状渦巻を基調としたモチーフと類似の文様が波頂部を中心に配される。そして、胴部分には、1ないし2個の瘤が加飾される。Ib文様帶には、渦巻文等が施される。集合条線が横位にめぐらされるだけのものもある。」

各氏の諸磯b式終末の特徴、概念をまとめてみると次のようになる。器形は、口縁が「く」の字・靴先状に外反し、文様は、沈線が集合化し入り組み状・風車状の渦巻文、弧状、「<」のモチーフで飾られる土器が各氏の共通した諸磯b式終末の土器である。以上のように諸磯b式終末の土器は、認識されたのである。

諸磯式土器の型式が認定されてから、諸磯c式土器の型式設定、諸磯b式土器の細分と追ってきたのであるが、諸磯b式土器から諸磯c式土器への変化について、各研究者とも尚急激な変化であるという印象を持っていたのである。これは、諸磯c式土器の資料が少ない事もあげられるが、c式土器が、結節浮線文系と貼付文系の土器との整理がされていないということもあったと考えられる。

③ 諸磯c式土器の細分と直前の土器

1980年代になると、諸磯c式土器の細分と直前の土器について注目されるのである。1982年今村啓爾氏は「縄文文化の研究3」諸磯土器でc式土器を古と新に細分した。古段階をボタン状貼付文、棒状貼付文の土器下島遺跡出土の土器、東光台の土器などを当てた。また、新段階の土器は古段階から新段階への変化は連続的で明確な境界線は引きにくいとしながら、貝殻状・棒状の貼付文が結節浮線文土器に置き換えられた土器とした。ここで氏は、諸磯c式土器を二段階に細分するのであるが、諸磯b式土器と諸磯c式土器の間は、急激な変化という印象を持ち諸磯b式土器から、諸磯c式土器への変遷は示されなかった。

今村氏の諸磯c式土器細分と前後して、1980年頃に諸磯b式から諸磯c式土器の間を埋める土器の存在が予想されたのであるが、その実態としての土器資料が現れたのは1980年代以降の発掘調査によるものである。前述の各論考によって認識された諸磯b式終末や諸磯c式土器の範疇にはいらない土器が糸井宮前遺跡で出土したのである。

糸井宮前遺跡出土の土器（関根1987）

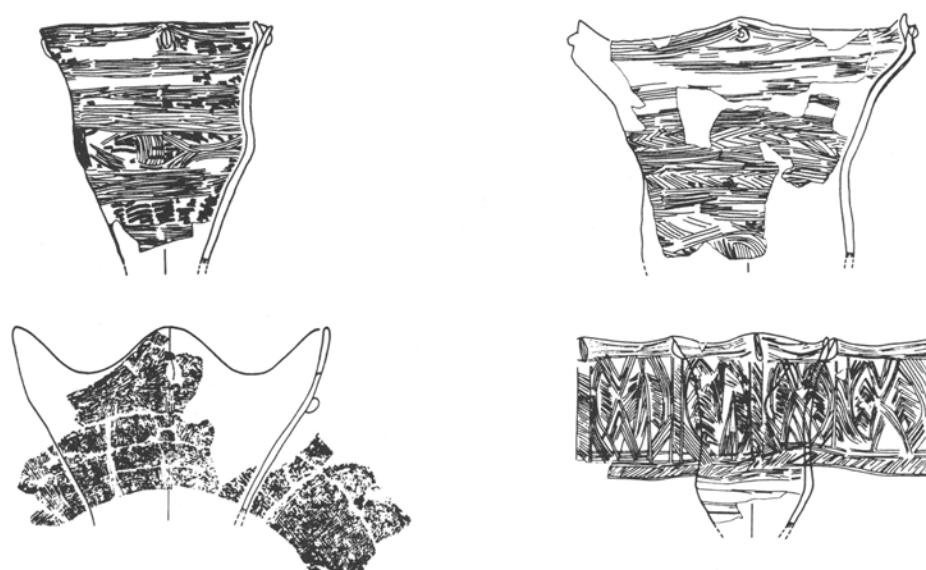
筆者は、「糸井宮前遺跡II」の報告書中で概要を記述したのであるが、諸磯c式土器の直前段階をもうけるよりは、諸磯c式土器の古段階と言われる土器が二分出来るのではないかと考えたのである。報文中II段階の諸磯c段階とした土器について、IIa段階を諸磯c式古の前半段階とし

た。この中で口縁部が波状を呈するものと、平口縁のものがあり、波状のもので把手の付くものは、前段階の靴先状の口縁から発展したものと考えた。また平口縁のものについても、口縁に四単位のボタン状、棒状の貼付文を持つ土器について、この段階では器形は、I段階（諸磯b式新段階）の影響下にあるとした。胴部文様は、I b段階の把手や波状部に施文されていた縦位の()状弧線が、口縁部と底部の横位に文様帯を区画する沈線間に移行した。また、()状弧線を縦に分割する沈線もあまり発達していない土器とした。II b段階とした土器は、波状口縁が無くなり、口縁部四単位の規制がなくなる。新たに口縁部に文様帯が作られ、矢羽根状の文様等が施文される。またボタン状、棒状の貼付文も胴部の文様単位とは無関係に施文される。胴部文様態は、()状弧線を分割する縦位の沈線が発達し、縦位の沈線間に矢羽根状の文様が施文される。と諸磯c式古段階の土器を二段階に分け、II a段階の土器を諸磯b終末の土器の影響下にある土器群として捉えたのである。また、I b段階とした土器は従来言われている諸磯b式終末の土器とは分離される土器でbからcへとつながる土器として捉えた。

鈴木敏昭氏の諸磯c式直前段階の土器（鈴木敏昭1988）

鈴木敏昭氏は諸磯b式土器からc式への土器変遷で糸井宮前遺跡81号住居址の土器を取り上げ諸磯c式土器の直前段階とした。その内容は、以下のとおりである。

「81号住居址出土土器は、5点の深鉢はいずれも集合条線で文様が描かれており、きわめて親縁性が高い。これらを整理すると、矢羽根や斜めの集合条線を帶状に巡らせる点や、短隆帯を思わせる縦長の瘤は、c式（古）前半段階の特徴に相当近く、地文への縄文施文、横分帶文様構成、波状口縁の深鉢の存在等はb3式的だと看做すことができよう。おそらくこうした土器群が諸磯c式直前段階に存在するのだろう。しかし、今のところ数多くの住居址を検出した糸井宮前遺跡以外では類例が検出されておらず、仮設の域をでない。」とc式土器直前段階の土器型式の仮設を



3図 諸磯c式直前の土器

たてた。

細田勝氏の諸磯 c 式直前段階の土器（細田1992）

細田氏は諸磯 c 式土器について次のような見解を提示した。

「諸磯 b 式終末から c 式最古段階の土器群を図示し、口縁が外反気味に開く深鉢型土器、平縁あるいは波状縁を呈する深鉢型土器で、口唇部に縦長の貼付文を有し、この部分に窪みを持つ特徴的な口縁部形態を示す土器の二形態の土器に分けた。後者の器形・文様帶の配置からは、口縁部が幅の狭い屈曲部から上部にあり、以下頸部・胴部文様で構成されている。屈曲部から上部の文様帶は、矢羽根状文や風車状入り組み文が施文されている。貼付文の施文される波頂部の窪みは、系統的には 1 a + 1 b 文様帶型の口縁部にあり、靴先状口縁の効果を 1 a 文様帶一帯で表現した。諸磯 b 式終末から c 式初頭段階には、靴先状大波状口縁と、付随した 1 b 文様帶が衰退し、1 a 文様帶がそれにとって代わる様相が指摘される。1 b 文様帶の省略化と II 文様帶の拡張は表裏一体の現象である。」

前者の外反気味に開く器形のうち、II a 文様帶としたものは、本来胴部文様（II）帶の上端区画の特徴として機能していた部分であり、この部分が 1 a 文様帶と相似関係を示すことにより、貼付文を受容し文様帶化したものと考えられる。地文である密接した条線帶は、II b 文様帶の拡大にともなって定着したものであろう。従って縦区画を基調とした II b 文様帶の成立は I b 文様帶の衰退に伴う、胴部施文域の拡大化現象と理解することができる。」

以上の三者の諸磯 c 式直前の土器をまとめると、器形は口縁が外反気味に開く深鉢、波状口縁の深鉢、文様は、口縁に縦長の瘤が添付される、文様帶の横分帶から縦分帶に変遷する土器、ということになる。

以上により諸磯 b 式終末、諸磯 c 式直前の土器の概念がほぼ出来上がり、この種の土器の編年的位置づけが可能となったのである。

3 地域における諸磯 c 式以前の土器

① 土器の分類（4 図）

前項までの研究史の検討により諸磯 b 式終末から諸磯 c 式土器の概念が準備された。では、諸磯 b 式終末の土器と諸磯 c 式土器の間を埋める土器は、この時期の群馬県地域でどのような変化をしていくのであろうか。

諸磯 b 式土器から、諸磯 c 式土器への変遷を見るために下記の分類に従って、土器を並べてみよう。土器の分類は、器形によって分けた。これは、文様の施文域が器形によって、左右されるからである。諸磯 b 式終末から諸磯 c 式時に至る間の変化と地域性を見るのには、各器形の土器から文様の変化を追うのが妥当であろうと考えたからである。

但し、器形の分類は、諸磯 b 式終末段階のものを基準としており、諸磯 c 式にまで必ずしも系統的につながるものではない。この器形による分類は、器形の変化と、文様の変化の両面から土

器の変遷を見るためのものである。「器形の変化・文様の変化」によって、地域の様相や画期を見極めることができると考える。

A器形 口縁が大きく開き、屈曲の度合いが強く靴先状になる波状口縁。

B器形 口縁が内側に屈曲し口縁部の波状が小さい。

C器形 口縁が大きく開き内湾気味に立ち上がる。口縁部は平口縁で、突起状のものが付く。

B—C器形 B・C器形の中間型。平口縁もしくは、小波状口縁で口縁の一部が屈曲する。

D器形 口縁が大きく開く波状口縁でやや内湾気味に立ち上がる。

E器形 平口縁で底部から緩やかな曲線を持って開く。

以上、口縁部形態の違いにより、6種類に分けた。なお、胴部下半に膨らみを持つ土器が各器形に存在する。その膨らみ部分は、文様帯が作られる場合と、文様帯の区画になる場合がある。

土器文様帯の区分については、下記のように区分し、鈴木敏昭氏論文（1980, 1988）を参照した。

I a 文様帯 口縁部屈曲部上部文様帯

I b 文様帯 口縁部屈曲部下部文様帯

II 文様帯 脊屈曲部下文様帯

② 各段階の変遷過程

上記の分類に従って、各器形の土器と文様の変遷を段階毎に検討してみよう。（註8）

I期—諸磯b 3式終末—(6・7図)

この段階の基本形として、A器形の土器は位置づけられる。この土器の一部を省略した器形・文様の土器が各器形の土器になる。A器形は、いわゆる靴先状口縁を持つ大型波状口縁の土器である。靴先上口縁（4図1）が肥大化し、胴部径に比べ波状口縁径が大きく外反する形態を持つ土器である。文様は、I a・b文様帯に渦巻や入り組み状の曲線、弧線が施文される。II文様帯は、横位の沈線で多段に区画され、その一区画に口縁と同様の文様が施文される。

B器形の土器は、四単位の波状口縁で屈曲を持つ。（4図2）。文様は、I文様帯のうちI b文様帯が省略され、I a文様帯は、平行線によって三角に区画し、口縁波頂部に瘤状の貼り付けが施されるものもある。II文様帯は横位の平行線で多段に区画され胴部下半の膨らみ部に従来I b文様帯にあった文様が移植される（6図5, 8）。

C器形の土器は平口縁で口縁部に四単位の瘤状貼付や小突起などのアクセントが付けられる。この器形は、I a文様帯が省略され、I b文様帯に文様が施文される。A器形では、四単位の波状口縁に影響され、I b文様帯も四単位になるが、C器形のものは、口縁の四単位の瘤・小波状とは相関性が認められるものは少ない（6図10～12）。B—C器形はこの段階では、認められない。

D器形は、緩やかに内湾した波状口縁になる。I文様は口縁部に屈曲を持たないためI a部分がI bと合体したもの（7図14）、I aの省略したもの（7図17）、I b省略（7図15, 16）がある。I bの文様は、弧線や曲線、直線による菱形をモチーフとしている。II文様帯は（7図13）

のように省略されるか、横位の沈線を多段（7図18）に施文する。

E器形の土器は平口縁、バケツ形に開く土器。口唇部に刻みや小突起などのアクセント四単位施文される。胴部形態は、屈曲を持ち外反気味に口縁に続くものや、胴下半部に膨らみを持つものもある。I a文様は、（7図20）のように横位の沈線や、（7図23, 24）の小突起、刻みで代用される。I b文様は、弧線や曲線、直線による菱形をモチーフとしている。II文様は、D器形同様横位の施文や省略がある。

施文具は、竹管が主体である。浮線による施文の土器は、糸井宮前遺跡では21,474点中220点である。（諸磯b～c式土器点数中）その他の遺跡についても浮線文土器の比率は少ない。

II a期—諸磯c式土器直前—（8図・9図上段）

A器形は前段階の四単位の靴先状の波状口縁を踏襲する。（4図6）。文様は、口縁部のI b文様帯に、前段階にあった入り組み状の渦巻文から変化したと思われる()状の文様がみられる（8図27, 29, 30）。

B器形の小波状口縁の土器では、四単位に縦長の粘土紐が張り付けられ、その部分をやや内傾させるなど前段階の波状口縁の影響を思わせる（4図7）。I a文様帯は口縁に沿って沈線が施文され、II文様帯は、横位区画された中に矢羽根状沈線、斜線が施文される（8図32）。

この段階では、B器形とC器形の中間型のB-C器形が出現する。四単位の小波状口縁で、屈曲が緩やかになる。棒状粘土瘤の貼付や、口縁に刻みを持つ（4図8）。I文様帯は口縁に沿って沈線が施される。II文様帯は胴部の膨らみ部分に入り組み上渦巻き、矢羽根状沈線が施文される。（8図33～35）

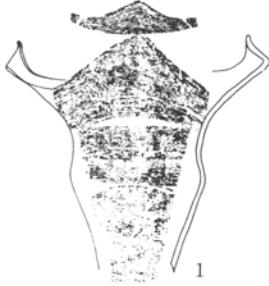
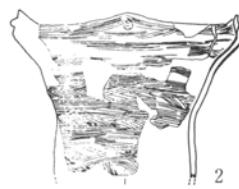
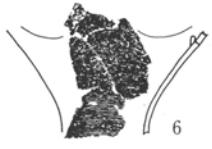
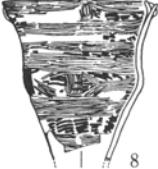
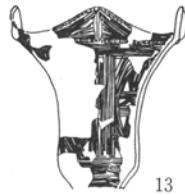
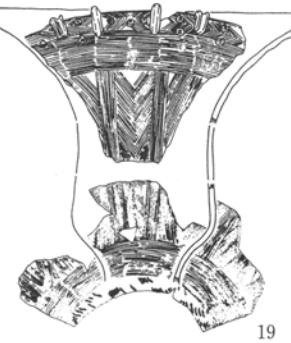
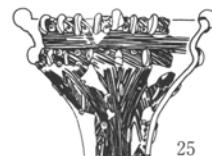
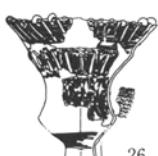
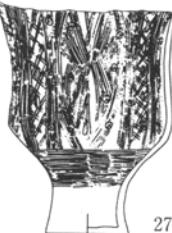
C器形は（4図9）は、I文様帯は狭く横位の沈線が施文される。II文様帯は、沈線による横位の区画内を斜線、矢羽根状の文様によって充填させる（8図36, 37）。

D器形は類例は少ないが、存在する（4図10）。前段階同様緩やかに内湾する波状口縁で、波頂部に刻みと粘土瘤を施す。I a文様帯を持ち、I b文様帯が省略される。II文様帯は、横位の区画内を斜線、矢羽根条線で充填するようである。

E器形はバケツ状に平口縁が開く形態。口縁に四単位の粘土瘤貼付や刻みを持つ（4図11）。I・II文様帯は口縁側縁部に粘土瘤が貼付されることで分帶される。沈線による横位の区画内を斜線、矢羽根状の文様によって充填させる。（9図46～48）。

この段階の特徴は()状の文様が、I b文様帯に現れる。また、4図9の土器のように前段階の4図3土器のI b文様帯がII文様帯に移動するものもある。CからE器形では、II文様帯の胴部文様は、前段階に引き続き横位の分帶が進み、数段にわたって横位区画する土器が主流となる。僅かに横位区画の中を斜線、矢羽根状、渦巻状、「<」状の文様が施文されるのであるが前段階に比べ横位の文様の幅が狭まり、文様構成自体崩れる傾向にある。施文具は、竹管による集合化された沈線が多くなる。

II b期—諸磯c式土器初—（9図下段・10図）

	A 器形	B 器形	B-C器形
I 期			
II a 期			
II b 期			
III a 期			
III b 期			
			

4 図 諸磯 b ~ c 式土器変遷図

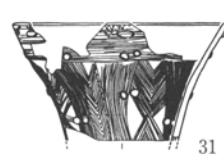
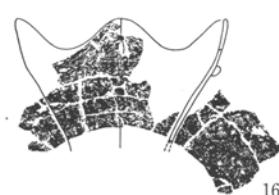
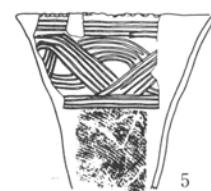
C 器形



D 器形



E 器形



A器形の口縁が靴先状になる土器は、さらに口縁が極端になり大型の把手になる(4図12)。把手には、透かしや棒状の粘土瘤が貼付される。I a文様帯は、口縁・把手に平行した沈線になる。I b文様帯は()状の文様と矢羽根状の文様モチーフを持つ。II文様帯は、口縁屈曲部下からの垂線によって区画され、I b文様帯と同様()状の文様や斜線、矢羽根状線が施文される。

B器形の土器は(4図13)、四単位の小波状口縁頂部に棒状の粘土瘤の貼付や切り込みが施される。I文様帯は前段階同様のモチーフを持ち、口縁部破片のみでの区別は難しい。II文様帯は、A器形同様に()状の文様を持つ。

B-C器形の土器は(4図14)、I文様帯は、前段階を踏襲する。II文様帯は前段階では、多段化された横位区画の胴部膨らみ部に入り組み状渦巻文が施文されていたのであるが、この段階では、膨らみ部が施文域の区切りになる。すなわち、膨らみ部より上の部分で()状、矢羽根状の施文がされ、膨らみ部下には、横位の沈線が施文される。(9図52, 54)

C器形の土器は、I文様帯には棒状の粘土瘤が四単位貼付され、横位の沈線や矢羽根状線が施文される。II文様帯は他の器形同様の文様を持つ。(9図55・10図58)

D器形の土器は四単位の波状口縁で、波頂部側面に粘土瘤が貼付される。I文様帯は、B器形同様の文様モチーフや口縁に平行に横位の沈線を充填する。II文様帯においても他の器形同様のモチーフを持つ(10図64, 65)。

E器形についても前段階から引き続き、I文様帯には、横位の沈線が施文され、口唇部に四単位の刻みや粘土瘤の貼付が施される。II文様帯は、他の器形のものと同様の文様を持つ。

この段階の文様施文の特徴は、II文様帯の横位区画の幅が広がり多段化されていたものが一段区画になる。前段階のI文様帯に見られた、()状弧線文がII文様帯にもみられるようになる。A器形把手部のI b文様帯にも()状の文様が施文される。II文様帯の胴部についても四単位に垂線で区画され、()状弧線が施文されその中を矢羽根状の沈線が充填される。これは、四単位になる波状口縁に施文されていた()状の文様が胴部に移行した後も、口縁部の四単位に規制された結果と考える。

II文様帯については、前段階の多段化された横位区画の影響と思われる()状の文様が多段化されて施文されるもの(10図61)がある。(9図41)にも()状の文様がII文様帯に施文されているのであるが、61と異なるのは41の土器は、多段化された横位区画の中に()状の文様を充填している。61の土器は、縦位の沈線による区画の中を()状の文様を入れ子状に施文されている。

II a段階とII b段階の大きな違いは横位区画優先か縦位区画優先かによって分けられる。

施文具も前段階同様集合化された竹管による沈線が主体である。

III a期—諸磯c式土器古一(11図・12図上段)

III期になると、諸磯b式終末段階としたI期の器形を直接的には引き継ぐものが少なくなってくる。胴部下半の膨らみを持つことが前段階から継承される。

A器形の土器は、I文様帯に集合沈線による矢羽根状文が施文される。把手には透かし、印刻

等が施され、小粒のボタン状の粘土瘤が付けられる。(11図74～76)

B、B—C、C器形はこの段階で区別が付かなくなる。前段階で小波状の口縁であったものが、平口縁になり緩やかに内湾する。口縁が内屈するものもある。胴部下半は前段階同様に膨らみ部を持って底部に至るものと、緩やかな曲線を持って外反し底部になる土器もある。I文様帶は、横位の沈線によって区画され矢羽根状、斜線等が施文される。粘土瘤は、口縁部を巡るように棒状、ボタン状のものが貼付される。II文様帶は、胴部の膨らみ部下を横位の沈線で区画した中を縦位の沈線による縦区画内に前段階同様沈線()状、矢羽根状のモチーフを持つ(11図77～82)。口縁部全体に棒状、ボタン状の粘土瘤が付けられる。また、口唇をめぐるよう刻み等を施すものもある。

D器形は、緩い波状口縁になり、波頂部に粘土瘤による装飾が施される。D器形は口縁部に棒状、ボタン状の粘土瘤を貼付する。I文様帶を比較的広く取り粘土瘤等を貼付するもの(12図91)と文様帶の幅が狭く口縁に平行に沈線を施文するもの(12図92)がある。II文様帶は、他の器形と同様の文様モチーフをとる。

波状口縁や平口縁のI文様帶については、棒状、粘土状の貼付が前段階の四単位ではなくなり、個体によって異なる。また、I文様帶は、前段階より文様帶の幅が広がる傾向があり、矢羽根状や横位の集合沈線が施文される。胴部は、縦区画する沈線間に()状弧線文が施文されるが前段階のように四単位に区分されるものではなく、個体によって異なっている。施文具も集合化された沈線が主体である。

III b 期—諸磯 C式土器新—(12図下段・13図・14図)

この段階になると、さらに器形の統合がおこなわれる。

A器形は靴先状の大波状口縁から大きな把手へと変化したのであるが、本段階では把手の部分資料は確認できたが、復元できる資料は無く今後大きな把手の付いた資料が出土するのに期待したい。把手のある土器とは別に、現時点では資料(4図24)の口縁に付く大きな耳朶状の貼付などが、把手の変化した部分でA器形を意識したものと考えられる。

その他、本段階では、前段階の各器形に相当する土器は次の様に変化する。

A器形の系統は、平口縁で口縁部が二段に屈曲する(4図25, 26)。

B、C器形の系統は口縁が「く」の字に屈曲するもの(4図29)。

D器形は資料は少ないが(4図30)の様に小波状の土器がある。

E器形は口縁に屈曲を持たず直線的に開く(4図31)

各器形の胴部については、胴部下半に膨らみ部を持ったり、曲線を持って外反しながら口縁にいたるものと、直線的に開き口縁に続く形態等がある。

文様は、I文様帶の口縁部文様帶が広がる傾向にある。特に(4図26)などは口縁部文様帶を広く持つ。I文様帶に耳朶状、棒状、ボタン状の粘土瘤の貼付が多くなる。II文様帶の胴部は、ほぼ前段階と同様のモチーフを持つが()状のものが崩れ、縦方向の鋸歯状の施文になる。斜線

による鋸歯状の文様の間に三角形の無文部を作るようになる(4図29)。粘土瘤による棒状、ボタン状の貼付文が胴部にまで及ぶ。施文方法も集合沈線が主体である。

③ 諸磯 b 式土器から c 式土器への変遷

前項では、I期からIII期に至る段階変遷を器形の系統を追うことによって、器形の変化と文様変遷を見てきた。その結果、諸磯 b 式土器と諸磯 c 式土器に至る過程で器形と文様の変化にズレが認められた。I期としたものは、研究史の検討からも明らかなように諸磯 b 式土器新段階に位置づけられる。IIa期としたものは、I期に比べ口縁部が四単位の小波状口縁になり、屈曲が緩やかで、棒状粘土瘤の貼付や、口縁に刻みを持つ。諸磯 c 式土器へつながる胴部下半部に膨らみを持つ器形の土器が出現する。I文様帯は、A器形以外は狭くなる傾向にあり、II文様帯は、横位区画の間隔が狭くなる。文様は、口縁に四単位で粘土瘤を貼付するなどの特徴が現れ、諸磯 c 式土器にある()状の文様の萌芽が認められる。IIb期では、IIa期の器形を引継ながらもII文様帯の幅狭の横位区画だったものが、口縁と底部の間が広がり、縦位区画を意識したものになった。文様は、広い区画となったII文様帯に()状の文様が施文される。IIIa期では、器形は、前段階を引き継ぐものは少なくなるが、胴部下半の膨らみを持つ器形は踏襲される。I文様帯が広がり、前段階の四単位であった粘土瘤がA器形を除き単位性を失いI文様帯を巡るようになる。II文様帯は、前段階同様である。IIIb期では、器形の系統を追えるものは、D器形、E器形で胴部下半の形態を残して、口縁部形態は異なってくる。I文様帯の幅が広がる。II文様帯にもボタン状、棒状の粘土瘤が貼付されるようになる。

以上まとめると、IIa段階で諸磯 b 式土器とは異なり諸磯 c 式土器につながる新しい器形()状の文様モチーフが出現する。IIb段階では、II文様帯の区画・モチーフが前段階とは異なる方法が取られるようになる。このII期をもって、諸磯 b 式土器と諸磯 c 式土器との画期とし、文様帯構成の違いから、IIa期を諸磯 b 式終末段階、IIb期を諸磯 c 式段階の初頭としたい。

4 ま と め

① 諸磯 c 式土器の地域性

群馬県地域の諸磯 b 式新段階から諸磯 c 式に至る土器変遷を見た。その結果、施文工具の竹管による沈線は、平行沈線の間隔が狭められ集合化される。文様モチーフは、口縁部文様帯にあったものが、次第に胴部文様帯に移行し施文される変化をとってきた。ここに追加されるのが、新たに装飾として取り入れられた粘土紐による装飾である。これは、前項の研究史でも触れているように諸磯 b 式土器の口縁部にある獸面把手から、ボタン状の貼付に変わり縦長のものが、口縁部に飾られたのである。それが発達して器面全体に装飾されるようになったと考えられる。

群馬県地域の土器資料によって諸磯 b 式土器から諸磯 c 式土器への変遷過程を追ってみた訳であるが、各器形に分けその変遷過程をほぼ追うことが出来た。今回扱った諸磯 c 式土器は今村啓爾氏の言うところの(古)段階のものである。糸井宮前遺跡を主として県内各地域の遺跡からは、

(新) 段階と言われている結節浮線文の土器の出土例は少なく変遷の系統を考える資料がないため除外した。群馬地域における結節浮線文土器の出土の在り方は、他の地方の土器、例えば大木4・5式土器、浮島・興津式土器等と同様に客体的な存在である。むしろこれらの土器より出土数が少ない遺跡もある。結節浮線文の土器が諸磕c式古段階の土器(註9)に続くのであれば、土器の器形・文様の変遷にも連続性を持った土器があっても良いのではないだろうか。三上・赤塩氏(1994)の言うように結節浮線文系の土器は関東南部から甲信越地方に分布を持つ土器である。結節浮線文の土器は別に甲信越地域で変遷過程を捉えるべきであろう。群馬周辺に於いては、諸磕c式(古)としたものと、信州地方でみられる下島式とした結節浮線文の土器は三上・赤塩氏の言うように並行関係にあると考える。換言すれば、群馬地域では前項のような土器変遷が信州に於ける下島式とほぼ並行関係にあると考える。

縄文前期後半において、従来利根川下流域の浮島・興津式土器文化圏と対比される形で諸磕式土器文化圏はとらえられてきたのであるが、諸磕b式終末になると、さらに、関東北西部と関東南西部・甲・信州において土器変遷の違いがあることが確認できた。糸井宮前遺跡にみられるよう群馬地域では、口縁部の粘土瘤が棒状や、耳朶状の貼付文になり発達していく土器が主流である。花鳥山遺跡にみられる浮線文に刻みを入れていく方法を取る土器群は、現在のところ群馬県地域の資料からはその変遷過程が追えない。

もとより、土器の分類変遷は、後天的(現代人によって定義されたもの)なものであり、変遷のモデルを最初に考え、それにあう土器をある程度広い範囲から集め並べたきらいがある。そのために従来の土器変遷では、他系統の土器と土器の型式差を示す事に有効ではあった。しかし、同一型式内土器の下位レベルにある地域差を見いだすことには不向きであった。いわば広い地域における地域差を見るためのものであった。今回群馬地域という狭い範囲での資料を使用して、諸磕b式終末から諸磕c式に至る変遷過程のモデルを作ることによって、この地域のより具体的な特性が表現できたと考える。

同一時期において土器型式の違いが地域差と捉えるのは水平的な方法とすると、今回限定された地域の土器変遷を追うことによって、特徴をつかみ他地域との土器変遷の違いを見いだす事によって地域差を検討するのは、垂直的な方法といえるだろう。一つの土器が型式として認識されてから、細分される。また資料の増加により細分の細分がされる。当初設定した形式からはみ出してしまう土器が新資料として出土した場合にどのように解釈をするかという方法の一つとしてこのような形を取った。始めに、研究史を長々と記述したのは、このためである。認識された土器が、どのように理解され編年的位置づけがなされたのかを示しておく必要を感じたからである。

② 土器文様変遷と、出土遺物の実際

今回の各時期を通して土器を持っているのは、糸井宮前遺跡である。これらのことから、この時期については、糸井宮前遺跡がこの時期の土器モデル村の一つであるといえるのではないか。この出土数等の状況を考えると、ある時期の拠点となる集落(地域土器モデルの発信地とでも言

うべきであろうか。)では、土器変遷図に示すとおりの土器を持っている。それが、周辺地域に波及していく時には、土器モデルの特徴的な部分が広まり浸透して言ったと考えられる。特にII a・b期の土器は混在して出土し、遺跡数も少ない。土器モデルチェンジの一過程に納まってしまう段階の土器と考える。土器の文様変遷は短時間に進行していったものと考えられる。

この時期の出土状況を見ると、実際には、前章で段階変遷分けしたようにきれいに分かれて出土しているのではない。住居址から出土する土器は前段階の土器と、次段階の土器とが混じりあいながら出土している。一つの遺構の存在期間と、土器の変遷期間の違いが見られるわけで遺構・集落の変遷時間より、土器の変遷時間が短いと考える。

5 おわりに

今回は、群馬地域という狭い範囲での土器変遷を追うことで地域性を考えてみたのである。しかし、他地域との比較検討を充分には出来なかった。特に、下島式といわれる土器との並行関係整合性について細かい検討作業を課題として行かなければならない。また、III b期とした諸磯c式新段階以降の段階から十三菩提式に至る過程についても資料が少なく不明な点が多い。今後、これらを踏まえ広い範囲に於いて諸磯c式土器を検討して行かなければならないと感じる。

糸井宮前遺跡発掘以来、縄文セミナー「前期終末の諸様相」での討論と、だいぶ時間が経ってしまったが、本項を小地域に於ける諸磯b式土器から諸磯c式土器への変遷過程のまとめとし今後広い範囲に於ける該期の土器を見て行きたい。最後に、糸井宮前遺跡発掘以来御意見御指導をいただいた方々に感謝する次第である。

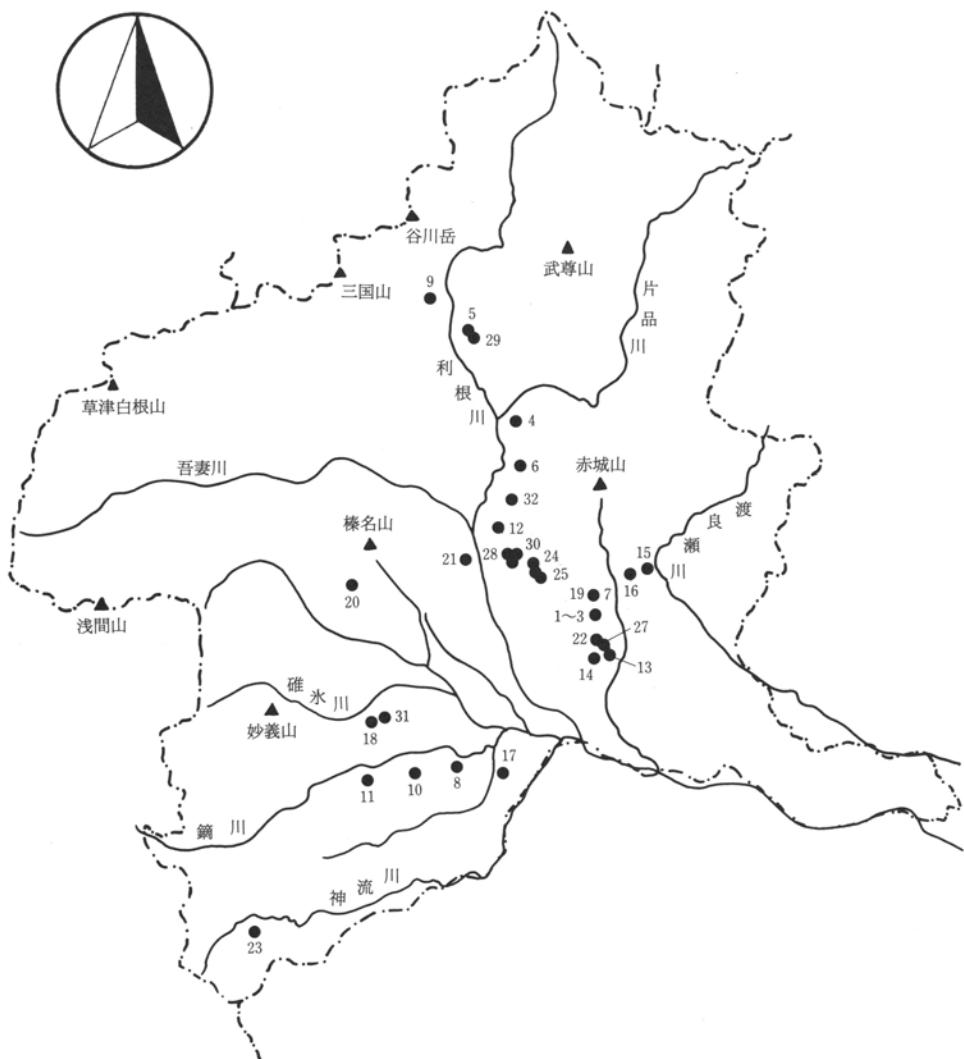
本項の一部は平成4年度事業団研究助成金によった。

註

- (1) 可児1986 季刊考古学17
- (2) 足利遺跡・東光寺裏遺跡・白石城遺跡等
- (3) 鈴木 1988, 細田 1992
- (4) 諸磯c式土器を示唆したが、図には現れなかった。先土器図譜二期十二号には諸磯c式土器掲載の予告が載っているのであるが、出版されていない。
これ以前史前学雑誌第5巻 昭和9年発行の関東縄文式文化編年学的研究資料では、横浜市下菅田貝塚、都田村折本貝塚の調査報告がされているがこの報告の中では、諸磯式土器の細分はされておらず、諸磯b式土器の浮線文土器と諸磯c式土器の結節浮線文土器を浮線文土器として一括して取り扱っている。また、浮島式土器を貝殻文のある土器として取り上げているが、型式名称は付していない。
- (5) 考古学雑誌 28の10 東京市麻布区本村町貝塚調査概報 昭和13年 江坂輝爾 諸磯a式、諸磯b式の記述あり。
- (6) 栃木県東光台遺跡となっているが、これは、群馬県の誤りである。
- (7) 1965年発行の日本の考古学でも、岡本勇氏により関東地方の諸磯c式土器として東光台遺跡の土器が図示されている。土器の説明では半截竹管による集合条線で器面をきれいに埋め、これを地文としたうえに、結節細隆線文などをめぐらし、また口辺付近に各種の貼付文を配するとして諸磯c式土器の認識について新しい見解はなかった。
- (8) 諸磯b式土器から、諸磯c式土器へ至る過程を器形の系統を追うことで表現した。しかし、土器の変化は、アナログで変化するのに対して、段階表示はデジタルである。そのため、個々の土器資料を各段階に無理矢理あてはめることになった。そのため、若干の矛盾が認められる。
- (9) 糸井宮前遺跡では、諸磯b～c式土器21,474点中、結節浮線文の土器94点、大木系土器67点、浮島系土器276点である。

掲載土器出土遺跡一覧

荒砥上諏訪 110 荒砥三木堂 55 荒砥二之堰 2、3、25
糸井宮前 4、5、8、9、16、27、28、29、30、32、34、35、38、39、43、45、46、50、52、53、57、61、68、72、73、
75、81、82、83、85、87、89、93、100、101、112、114、115、120、125、128、130、134、136
大友館 79、80、94 勝保沢中ノ山 7、19、54、104 上大屋樋越 10、11、20、22、102、103、106
黒熊 33、59、66、74 小仁田 14 佐久間 90、91 鞘戸原I 1 芝山 12、13、21、47、62、118
下吉祥寺 69 下触牛伏 70 城 23、24 月田・室沢 116、131 滝下 127 天神原 65 天神風呂 92
中善地宮地 36、58、63、67、77、84、95、111、126、133 七日市 56、113 二宮千足 108、122、124
新羽今井平 129 芳賀北曲輪 96、105、107、121、123 芳賀団地III 15、64 芳賀東部 132
波志江天神 41、42、48 広面 26、31、44、49、51、60、78、86、88、97、98、109 三峰神社裏 40、76、135
向吹張 46、72 横俵I 6、18 横俵V 17 吉田原 119 六万 37、73、99、117

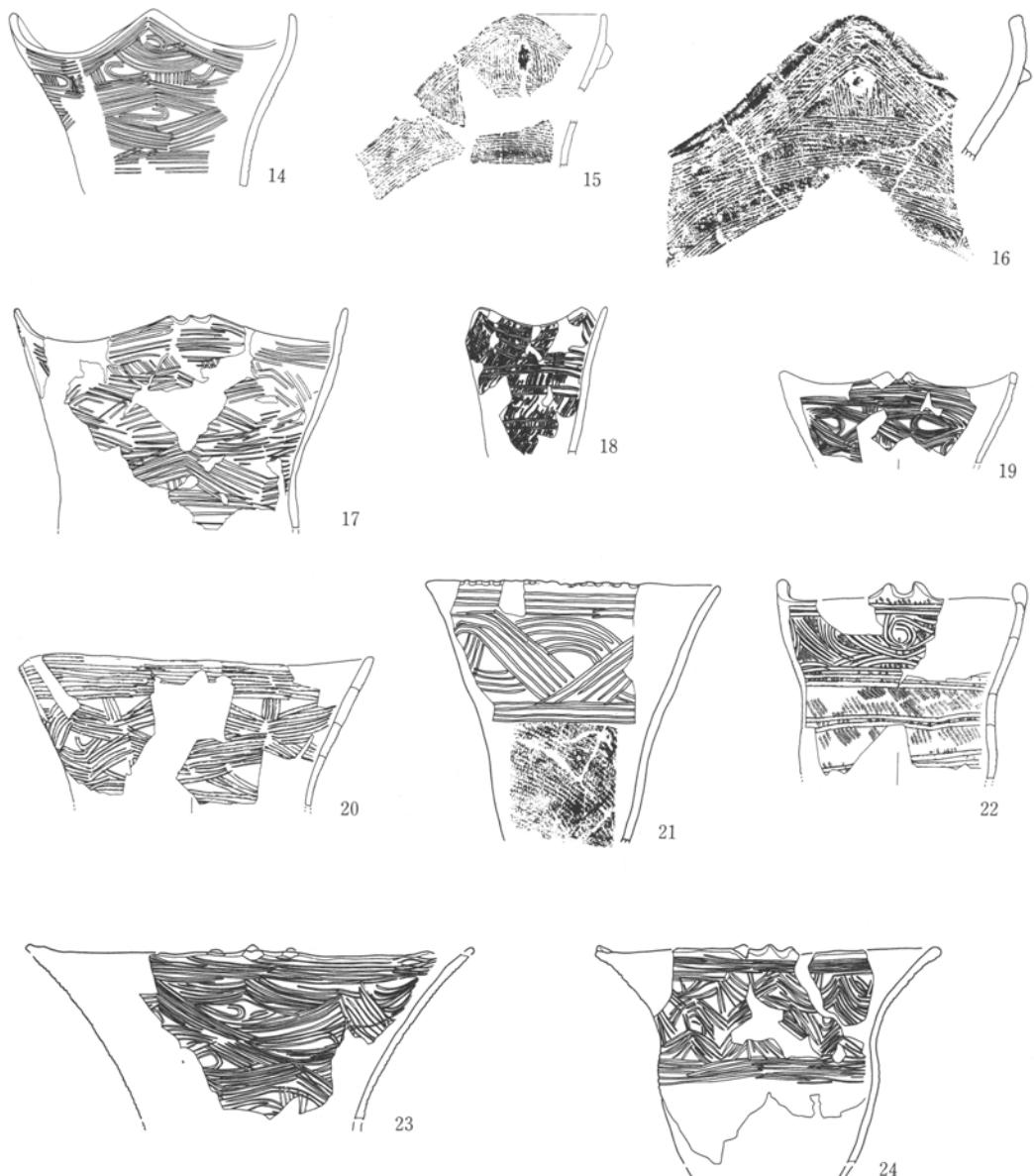


- | | | | | |
|----------|----------|---------|----------|------------|
| 1 荒砥上諭訪 | 2 荒砥三木堂 | 3 荒砥二之堰 | 4 糸井宮前 | 5 大友館 |
| 6 勝保沢中ノ山 | 7 上大屋・樋越 | 8 黒熊 | 9 小仁田 | 10 佐久間 |
| 11 鞆戸原 I | 12 芝山 | 13 下吉祥寺 | 14 下触牛伏 | 15 城 |
| 16 月田・室沢 | 17 滝下 | 18 天神原 | 19 天神風呂 | 20 中善地宮地 |
| 21 七日市 | 22 二宮千足 | 23 新羽今平 | 24 芳賀北曲輪 | 25 芳賀団地III |
| 26 芳賀東部 | 27 波志江天神 | 28 広面 | 29 三峰神社裏 | 30 横俵遺跡群 |
| 31 吉田原 | 32 六万 | | | |

5図 諸磯 b式から諸磯 c式遺跡分布図



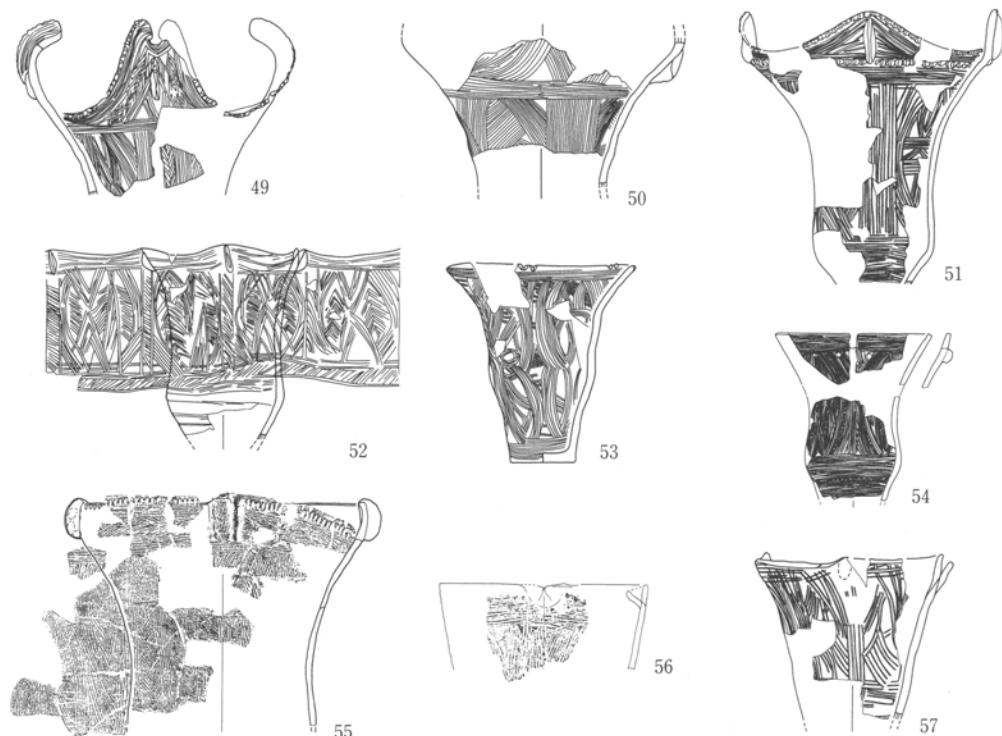
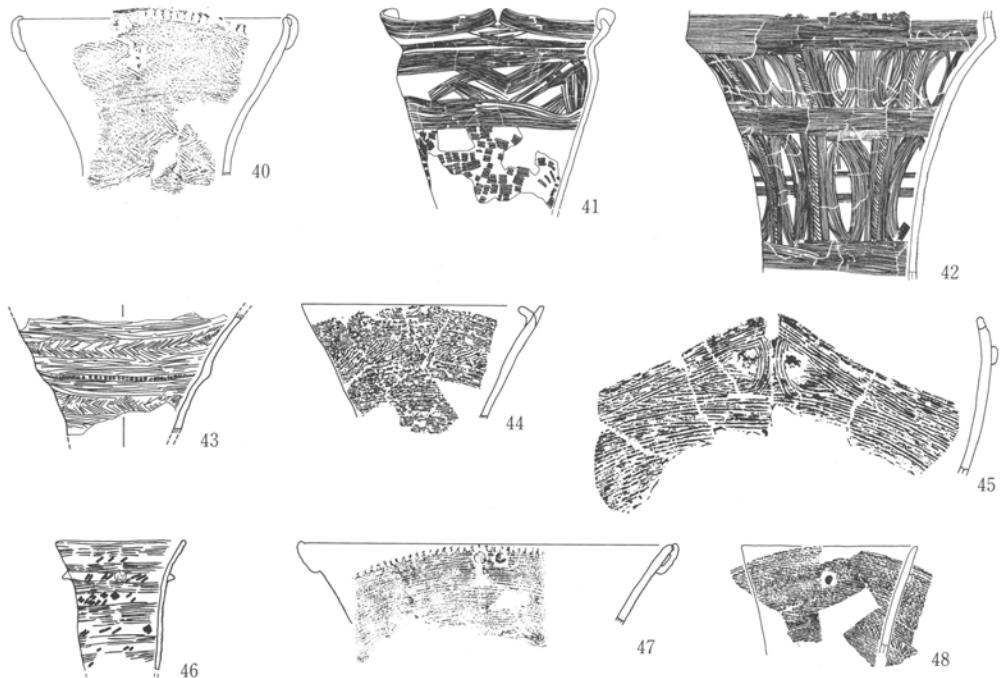
6図 I期の土器



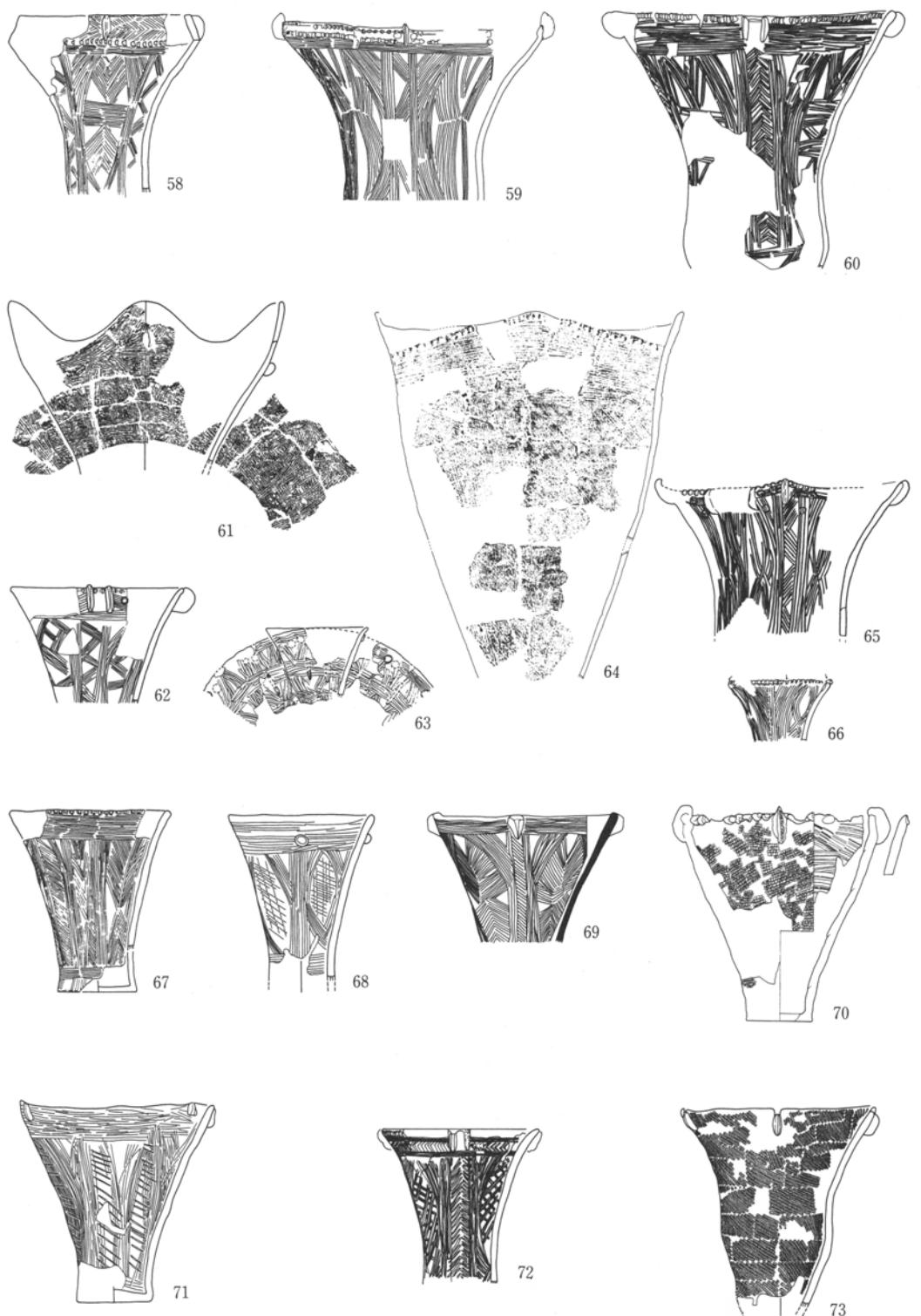
7図 I期の土器



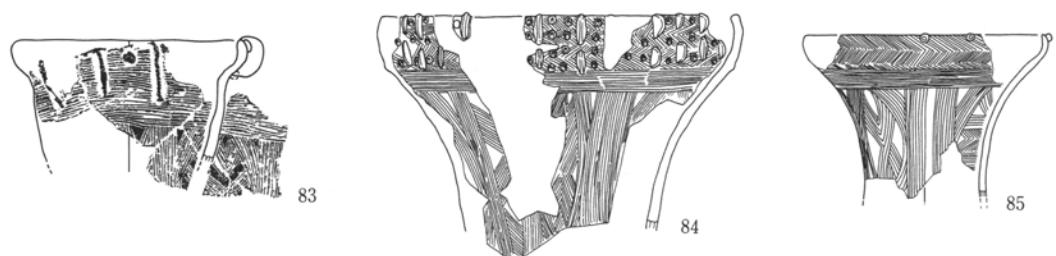
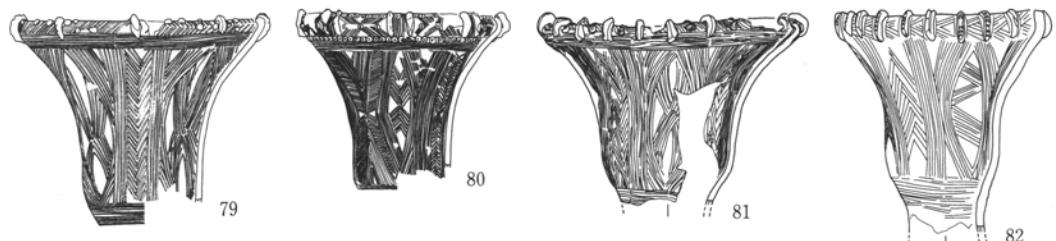
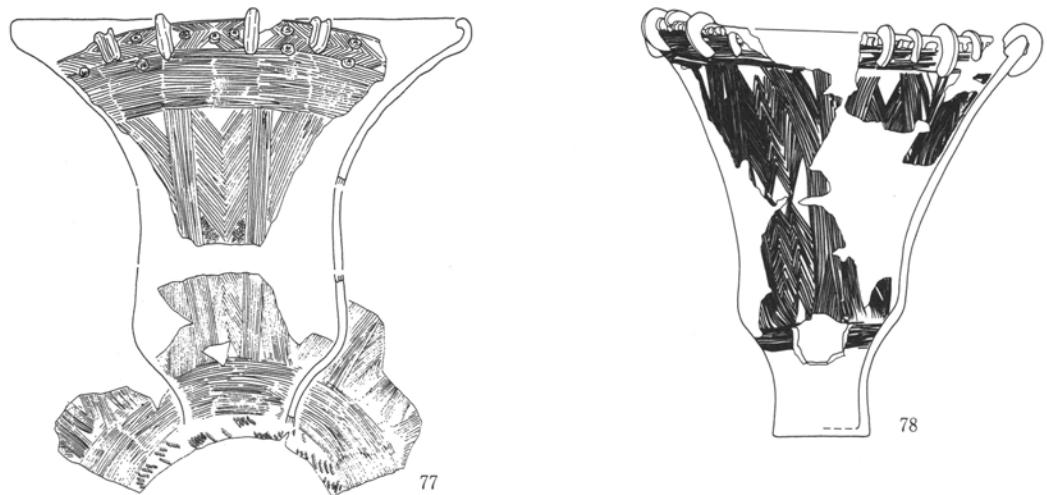
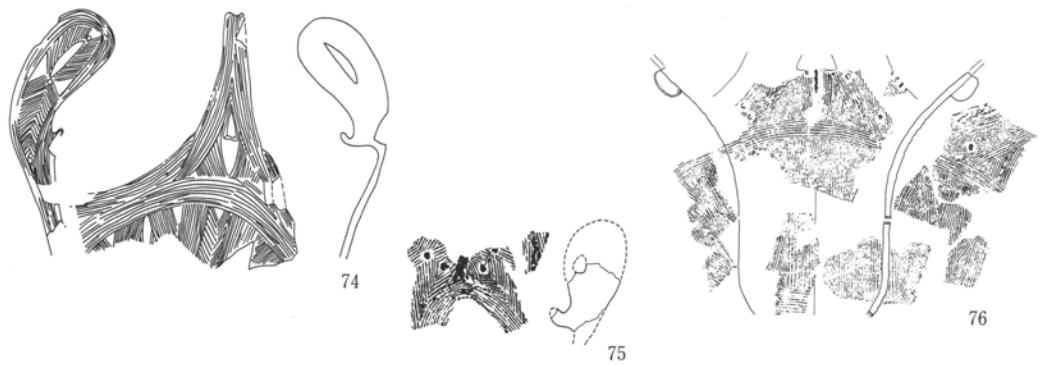
8図 IIa期の土器



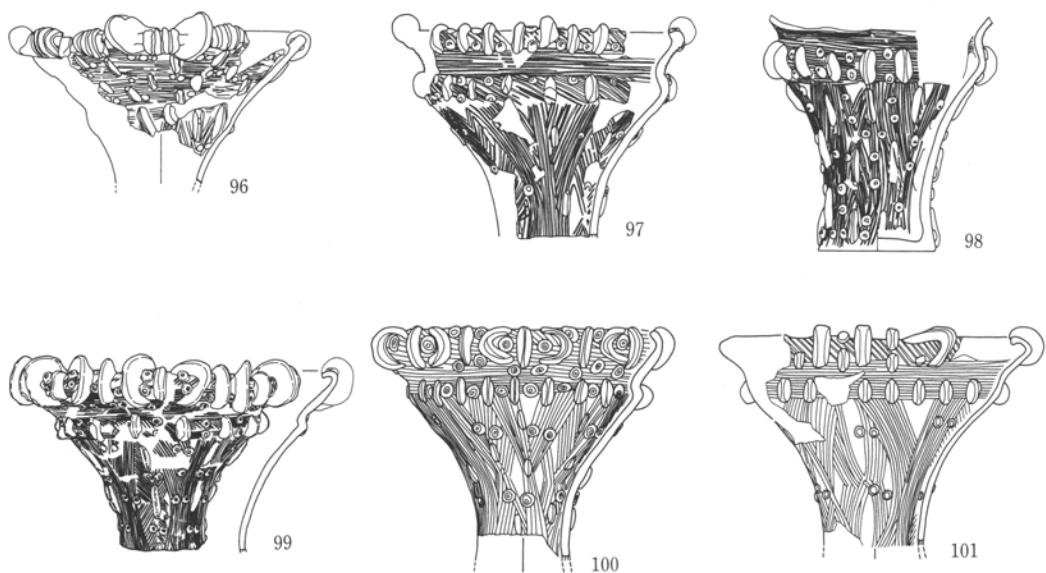
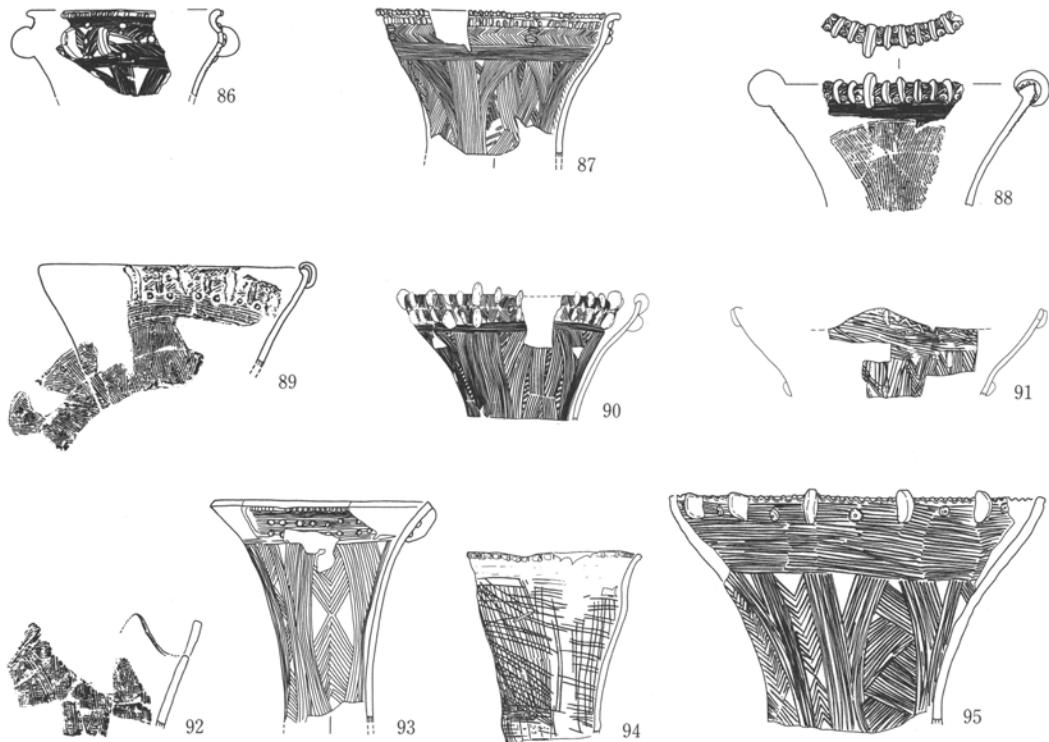
9図 上段II a期の土器 下段II b期の土器



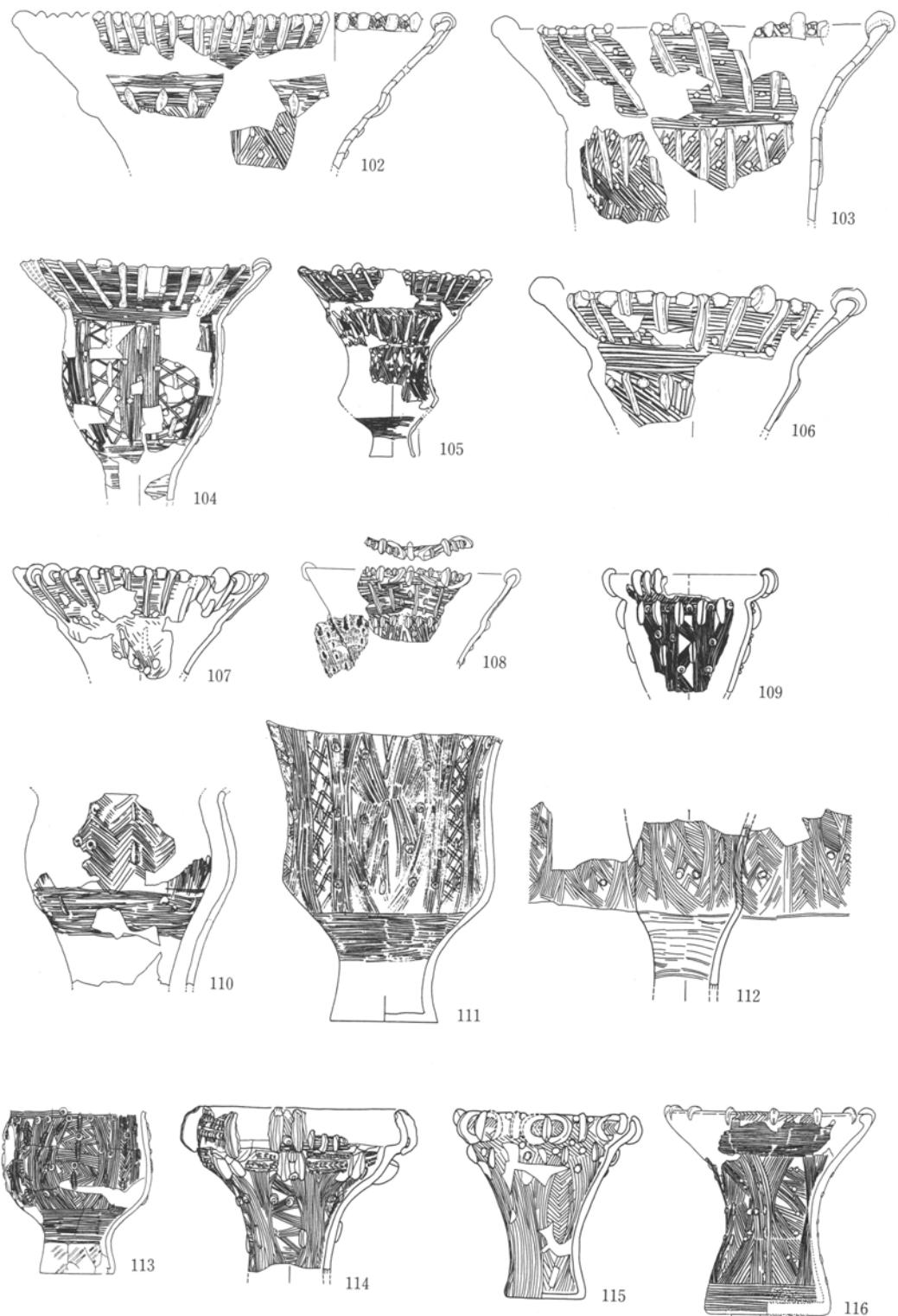
10図 II b 期の土器



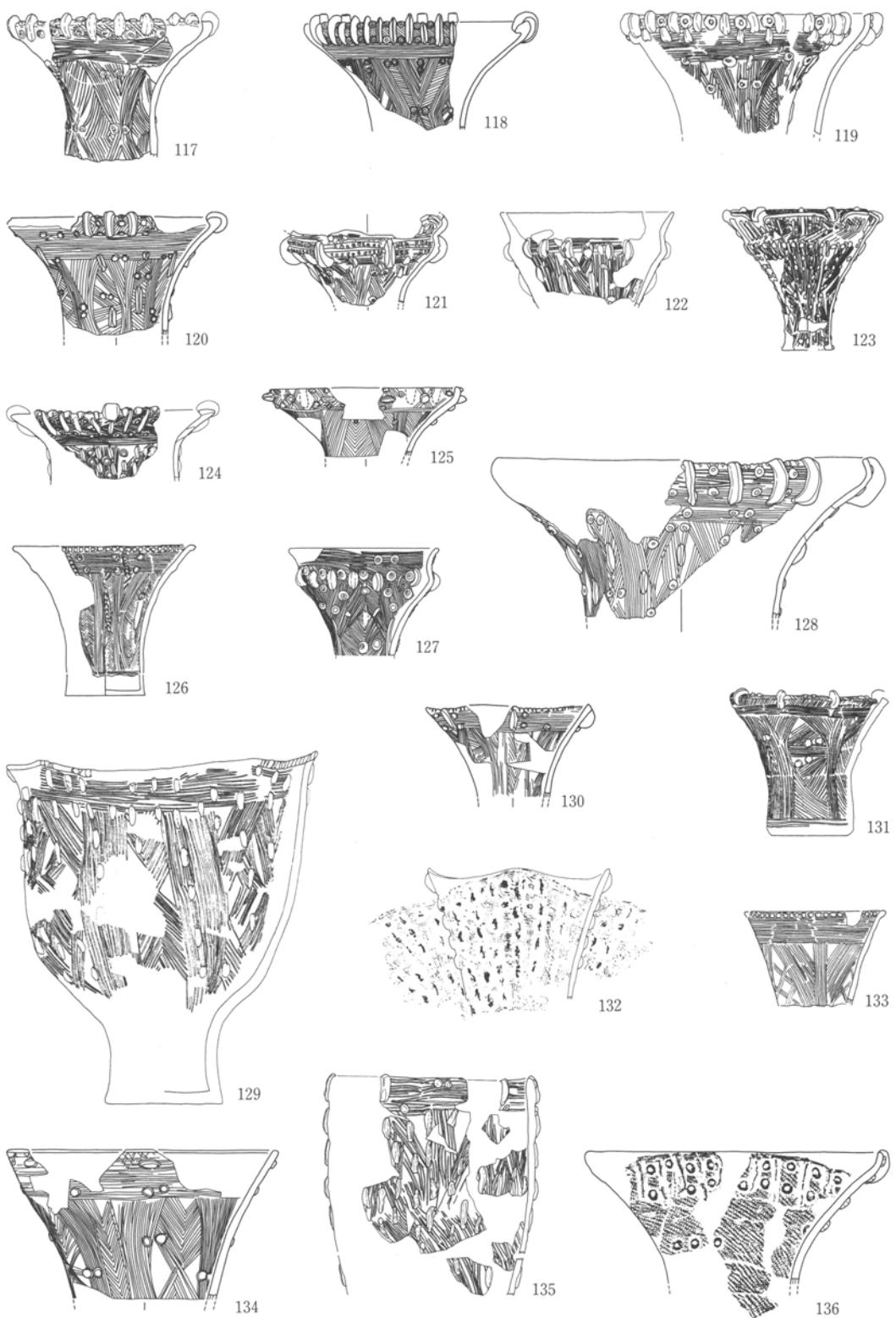
11図 III a 期の土器



12図 上段IIIa期の土器 下段IIIb期の土器



13図 III b 期の土器



14図 III b 期の土器

引用参考文献

- 飯塚 誠 1988 「書上下吉祥寺遺跡・書上原之城遺跡・上植木壱町田遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 井上 太 1992 「鞆戸原I・鞆戸原II・西平原」 富岡市教育委員会
- 井野誠一 1990 「芳賀東部団地遺跡III」 前橋市教育委員会
- 今村啓爾 1980 「伊豆七島の縄文文化」 武藏野美術大学考古学研究会
- 今村啓爾 1981 「施文順序からみた諸磯式土器の変遷」 考古学研究27-4
- 今村啓爾 1982 「諸磯式土器」 「縄文文化の研究3」
- 石原正敏 1989 「諸磯c式土器再考」 新潟史学22号
- 石坂 茂 1985 「荒砥二之堰遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 茂 1988 「勝保沢中ノ山遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 茂 1992 「荒砥三木堂遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 岩崎泰一 1986 「下触牛伏遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 内田憲治 1988 「城遺跡」 群馬県史資料編1
- 内田祐治 1975 「三宅島の埋蔵文化財」 伊豆諸島考古学研究会
- 大賀 健 1985 「関越自動車道(新潟線)水上町埋蔵文化財発掘調査報告書」 水上町教育委員会
- 大西雅広 1992 「二宮千足遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 及川 司 1988 「滝前・滝下遺跡」 藤岡市遺跡調査会
- 鬼形芳夫 1988 「新羽今井平遺跡」 群馬県史資料編1
- 金子正人 1990 「芳賀北曲輪遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 駒倉秀一 1990 「横俵遺跡群I」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 小島純一 1988 「月田・室沢遺跡群」 群馬県史資料編1
- 小安和順 1988 「佐久間遺跡」 甘楽町教育委員会
- 縄文セミナーの会 1993 「前期終末の諸様相」
- 鈴木敏昭 1980 「足利遺跡」 久喜市教育委員会
- 鈴木敏昭 1980 「諸磯b式土器の構造とその変遷(再考)」 土曜考古2号
- 鈴木敏昭 1988 「諸磯b式からc式への土器変遷」 埼玉県立博物館紀要15
- 鈴木徳雄 1979 「白石城」 埼玉県遺跡調査会報告書36集
- 鈴木徳雄 1987 「諸磯式土器研究の問題点」 第1回縄文セミナー資料集
- 関根慎二 1987 「糸井宮前遺跡II」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大工原豊 1993 「大下原遺跡・吉田原遺跡」 安中市教育委員会
- 大工原豊 1994 「中野谷地区遺跡群」 安中市教育委員会
- 田口一郎 1988 「中善地・宮地遺跡」 群馬県史資料編1
- 谷口康浩 1989 「諸磯式土器様式」 縄文土器大観第1巻
- 都所敬尚 1991 「横俵遺跡群III」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 都所敬尚 1991 「横俵遺跡群V」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 中澤貞治 1980 「下吉祥寺遺跡」 伊勢崎市教育委員会
- 中島 宏 1980 「伊勢塚・東光寺遺跡」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集
- 中村富夫・間庭 稔 1986 「大友館遺跡・三峰神社裏遺跡」 月夜野町教育委員会
- 能登 健 1988 「荒砥上諏訪遺跡」 群馬県史資料編1
- 羽鳥政彦 1987 「向吹張・岩之下遺跡」 富士見村教育委員会
- 羽鳥政彦 1992 「広面遺跡」 富士見村教育委員会
- 長谷川福次 1993 「芝山遺跡」 北橘村教育委員会
- 原 雅信 1990 「堀下八幡遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 平田貴正 1986 「大久保A遺跡・七日市遺跡」 吉岡村教育委員会
- 藤森栄一 1956 「中部」 『日本考古学講座3』 河出書房
- 細田 勝 1992 「諸磯c式土器研究への一視点」 埼玉考古29号
- 三上徹也 1987 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1」 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書1
- 茂木由行 1984 「黒熊遺跡群発掘調査報告書(3)」 吉井町教育委員会
- 山口逸弘 1992 「書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山口逸弘 1994 「多比良平野遺跡・白石根岸遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山内清男 1939 「日本先史土器図譜」
- 山内清男 1964 「日本原始美術I」 講談社
- 山下歳信 1981 「天神風呂遺跡」 大胡町教育委員会
- 山下歳信 1986 「上大屋・権現地区遺跡群」 大胡町教育委員会
- 湯原勝美 1993 「六万遺跡」 赤城村教育委員会
- 吉田 格 1956 「関東」 『日本考古学講座3』 河出書房